

B-2 羊毛織物のセツト性について（せん断変形の場合Ⅰ）

文化女大家政 小川安朗 成瀬信子 ○橋本 綾

目的 洋服を仕立てるとき、布地に変形を与えてアイロンがけを行ない、布地の熱可塑性を利用し、その変形を保つことによってくせとりをする。羊毛織物のくせとりの状態を解明するため、種々の変形を与え、その力学的特性を検討する。今回はそのごく基本的な変形として平織物を用い、たて方向およびよこ方向をつかみ、つかみの距離を一定にし、織物の平面的なせん断変形の場合について実験を行なった。

方法 たて、よこ織系 $\frac{2}{32}S$ のパンピースを用い、試幅10cm、つかみ間隔を16.2cmとし、中央部に測定の基準点をしるし、上チャックを固定し、下チャックを左および右に1cmおきに5cmまで平行移動してせん断変形を行ない、一定のアイロンがけ条件で熱セツトを行なった。セツト後、チャックからはずし、24時間後および1週間後の塑性変形をセツト角度およびセツト率で示した。

結果 1、平織パンピースのせん断変形において、左に織物を移動した場合と右に織物を移動して変形した場合とでは、セツト変形量が違うことがいえる。これは織系の捻りによる繊維方向と織系の引張り方向のなす角が異なるため、左、右に移動した各々の織系の伸長特性が違うためと思われる。2、織物のセツト性は、ある一定の荷重が加わった時セツト率が高い。織物のたて方向とよこ方向の伸長性能が違うので、この織物ではたて方向をつかんだときは左に移動した方が、よこ方向をつかんだときは右に移動した方が、逆の方向に移動した場合よりもセツト率が高いことがわかった。